

石井亮一の体育観に関する一考察

中川 一彦

A Study on Ryouichi Ishii's Ideas for Physical Education

NAKAGAWA Kazuhiko

The purpose of this study is finding Ryouichi Ishii's ideas for physical education through his works.

As the results, physical education in the institute of Takinogawa-gakuen that was established in 1891 by him was one of the course of study. And, the contents of it were any physical activity for education of the physical with keeping the fun in fundamentals. Additionally, it was confirmed that his ideas for physical education was in the current of the sensory-movement education that belonged to the school of Comenius; especially, was affected by the physiological education method of Seguin.

Key words: Ryouichi Ishii, physical education, Takinogawa-gakuen, sensory-movement education, physiological education method

1. はじめに

1872年、体術という言葉が使われ、学校などで体育⁴⁶⁾や養護⁴⁷⁾が考えられるようになる中、1891年、「孤女学園」を設立した石井亮一(1867～1937)は、1897年、「孤女学園」を「滝乃川学園」と改称し、そこで、本格的に、知的障害者の保護に努め、体育を重視した指導を実践していたことが知られている。^{49, 60)}しかし、その体育がどのようなものであったか等を具体的に示す研究はほとんどない。⁴⁵⁾そこで、本研究は、彼の著作物を紹介し、体育・体操に関する記述を拾い、わが国の知的障害者教育の始祖・石井亮一の体育観等について明らかにすることを目的とした。

2. 石井亮一の生い立ちと業績の概説

石井亮一は、1867年、佐賀市の武家の家に三男として生まれた。「武士の典形」といわれた厳父のもとで育てられ、謹厳な性格の人として成長し、1883年頃、立教大学校(現立教大学)に入学し、ここで、キリスト教の信仰を得た。彼は、大学を卒業(1891年)すると、立教女学院の教頭になった。そして、そのかたわら、同年の濃美大地

震で孤児となった20余名の少女を引き取り、「孤女学園」を設立した。この中にいた2人の知的障害児に強く関心を持ち、深い同情心を感じ、教育を試みた。これがきっかけとなり、1896年4月、彼は、知的障害者教育の研究と視察を兼ねて渡米し、同年12月に帰国した。^{35, 58)}そして、彼は、この渡米で、知的障害者教育の始祖・セガン(Seguin E. 1812～1880)の「生理学的教育法」を、直接ではなかったが、セガンの未亡人を介し学び、「滝乃川学園」を発展させた。

彼は、「外国に於て出版さるる斯道の権威的著書の先生によりて読まれざるもの無く先生の机上新刊専門書の見えざるは稀なりき」⁵⁷⁾とあるように、「外国専門書の著作に就きて研究を片時も怠らず新知識に於て一日たりとも時代に遅れて特殊児童の受くべき恩恵の一日にても薄らぐこと無からしめん」⁵⁷⁾として、その実践に努めるとともに、著書などにまとめたのである。

その代表的著作物は『白痴児 其研究及教育』¹⁹⁾(1904)であり、彼の死後、1940年、全ての著作物をまとめて出版された『治療教育』⁴²⁾と『教育学』⁴³⁾であろう。

表1-1 運動会目次

一	開會唱歌 祝日	女子部一同
二	旗取競争	幼稚園男児
三	全上	全 女児
四	頭上豆袋 (落ちぬ様にして歩む)	幼年 男児
五	盆上の茶碗 (水を入れ溢れぬ様に運ぶ)	全 女児
六	玉拾 (入数七個宛の玉を各段に運びて籠に入るの色に等)	全 男児
七	玉しやくひ	全 女児
八	唱歌 運動會	生徒 一同
九	遊戯 雀のうた	幼稚園一同
十	盲目毬拾	幼年 男児
十一	懸平袋送	女子部一同
十二	懸脚競争	女児 一同
十三	玉棒 (棒をつけ棒をかけ而して旗を抜き取りて歸る)	男児 一同
十四	土軍 (二人宛組の両足を高手に支へて進み行くなり)	女児 一同
十五	カアリセメント	男児 一同
十六	占領地 (其處を幾守りて白の旗を立て置きて一隊の囃聲以上)	男子部一同

表1-2 運動会目次

一	開會唱歌 祝日	生徒 一同
二	輪まはし	幼年 男児
三	旗取	幼稚園女児
四	盲目毬拾	幼年 男児
五	遊戯 菊の花	幼稚園一同
六	玉拾 (去年の秋男児に爲さしめたるものを)	幼年 男児
七	壺と夜 (壺の隊は白き旗夜のは黒きを待ち承の目にて前後をトし先となりしを追ふなり)	全 男児
八	旗取 (二列に並び二人占の競争なり)	全 女児
九	豆袋後投	全 男児
十	二人三脚	女児 一同
十一	羽根つき	男児 一同
十二	懸平玉争 (脊に糸もて懸ひ付けあるを互に取り合ふなり)	女児 一同
十三	カアリセメント	男児 一同
十四	袋風	女児 一同
十五	バスケツトボール	男子部一同
十六	綱引	女子部一同

以下、これらの資料と当時の「滝乃川学園」に関する資料を参考に、「滝乃川学園」における体育と石井亮一の体育観を整理した。

3. 「滝乃川学園」における体育

石井亮一は、体操を「形式に主なるもの」⁷⁾の学科として位置づけ、修身、音楽、国語、数学、図畫と同質なるものと分類していた。

そして、それは、児童の身体発達に留意して尋常小学校では、修身、国語、算術、唱歌、手工、裁縫と並んで、又、高等小学校では、修身、国語、算術、日本歴史、地理、理科、図畫、唱歌、裁縫、手工、農業、商業、英語と並んで教科目のひとつとして定められていた。⁸⁾

「滝乃川学園」における体育が、実際どのようなものであり、どの様に実施されていたかを直接明らかにする資料は見当たらない。

そこで、ここでは、増補石井亮一全集第4巻の中にある『学園のまとも』⁵²⁾と『滝乃川学園のその日その日』^{3,4)}そして『治療教育』⁴²⁾の中に散見される体操に関する記述から、「滝乃川学園」における体操(現今でいう体育)とその指導法を拾ってみることとした。

まず、『学園のまとも』の中では、「通学生ならば、自然運動少なき傾あり、可成戸外運動を奨励す。

……(中略)……男児は午後二時若しくは二時半(体操、唱歌等の稽古都合による)、女児は……(中略)……二時半若しくは三時以後、随意に庭園内にて運動せしむ。テニス、クロッカー、ブランコ、シーソー、鬼ごっこ、其他思ひ思ひなり。放任し難き児童は、当番附添ひつつ、遊戯室に集へて遊ばしめ、晴天の日には、或は手を引き、或は見張り⁵³⁾をなして、庭まわりを散歩せしむ。」⁵³⁾「勝負を競ふが如き、込み入りたる遊戯は、児童達の多く興味なし。」⁵⁴⁾「天長節には庭内に戸外運動会を催す」⁵⁵⁾、「11月3日、菊花の高き薫を身にあびつつ、戸外運動会を催し、体操、唱歌、遊戯、競技、競走等を為さしめて、賞品を出す事とせり。」⁵⁶⁾と示し、運動会については表1の様な目次が紹介されていた。(表1-1, 2)

『滝乃川学園のその日その日』の中では、「児童の最も好むのは唱歌と体操であります。今年になりまして運動服を制定改しました。……(中略)……他の学科は目に見る程の進歩をして呉れませんがこの体操だけは相当の進歩を遂げたと信じて居ります。集合、離散、共同運動等餘経機敏になった様に思ひます。」⁵⁾「四肢の不自由な生徒も相当居りまして、体操は困難な学科の一つでございましたが、此の一学期から一同でラジオ体操を行ふようになりましてから次第によくなって

参りました。団体的に何か致しますことが、生徒を導く上に大変よろしいことを知りました。」⁶⁾

そして、その指導法については、『白痴児、其研究及教育』¹⁹⁾と『治療教育技術』³⁴⁾の中で、「空腹のままにて児童を教場に入らしむべからず。」²⁰⁾、「義務として日々の学課に就かしむことなく、快樂としてこれをなすに至らしめざるべからず。必ず運動、遊戯、音楽等を以て、これを始めこれを終るべし。」²⁰⁾、「反復せしめよ。」²⁰⁾、「戸外に於てなし得べきことをば、決して室内に於てなさしむべからず。」²⁰⁾、「常に心を快活ならしむる様努むべし。」²⁰⁾、「自然の発達停止せるところより始むべし。故に各人各個の出発点あり。千篇一律の方法に甘んずべからず。」²⁰⁾、「先大体の運動より始めて順次小部分の運動に移り、又始は教師のなすがままに模倣せしめ、遂に自己の意思の命令により自由に行動し得るに至らしむるを要す。年齢既に長じたるものは其根ざすところ深きが故に、根底よりこれを矯正すること容易の業にあらず。故に成るべく早期に教練を始むべし。即幾分にてても異常を認めたる時は直に運動と覚官の教育に着手すべき時にして、其時期早に失する憂決してあることなし。」²¹⁾、「白痴児の運動を教練する場合に於ては、彼をして自己の観念を実行し、自己の目的を遂行せしむるを以て主眼とすべし。模倣的の運動並に命令に應ずるところの運動も亦必要なにあらざると雖、最後の目的は自己の精神界に浮べるところの理想に従て行動せしむるにあり。故に例へば或物を欲望しこれを得んがために手足を動かせしものは、他人の運動を模倣するか若しくは命令によりて自己の地位を变ずるものとは同日の論にあらず。種々なる遊戯は此目的を達するために必要欠くべからざるものなれば、宜しくこれを奨励すべし。」²²⁾、「凡て競技の際には児童等に"我等は遊戯をなしつつあり"といふが如き気分を有せしむる事必要なり。」³⁴⁾、「練習は成るべく簡単なるをよしとす。而して遊戯の方法は遊戯そのものよりも大切な事を忘るべからず。簡単なる遊戯競技を複雑なる方法を以てせんか、児童等の薄弱なる精神を混乱して遂に練習の目的を達し得ざるに至ることあらん。」³⁴⁾、「一度に一事を限りて習得せしむるやう注意すべし。」³⁴⁾、「教師の人格は練習の際に於て大なる力となるものなれば、指導者たるものは常に忍耐つよくしてしかも快活又楽天的ならざるべからず。例へば、児童等が所

期の目的を達し得ざるが如き場合に於ても決して失望の気色など表はさずして、彼等を鼓舞し激励して必ず成し遂ぐべしとの心を起さしむるやう努めざるべからず。而して教師は前以て能く練習の方法などを熟知し置くこと大切なり。」³⁴⁾、「練習の方法は常に一定して置くべし。例へば児童等を一列に並ばしむるにも其都度変更するが如き事あるべからず。且其他の練習に於ても毎回同じ色、同じ図面、同じ方針を以てすべし。これに反して時々其順序、材料等を変更せんか、薄弱なる精神を混乱し所期の目的を達し得ずして失敗に終る事あるべし。」³⁴⁾、「号令は極めて単純なるを要す。」³⁴⁾等としていた。

以上のような記述を元に、「滝乃川学園」における体育がどのようなものであったかをまとめてみると、それは、石井亮一の体操の位置づけ⁷⁾から、国語や算術などと並ぶ教科目のひとつであることまた列挙されている運動²³⁾から、散歩やラジオ体操からクロケータやテニスまで、各種の身体活動を内容とするものであること、そして、その指導法については、前述した「常に心を快活ならしむる」などの記述^{20,34)}、楽しいことを基本とし、発達段階に合わせ、練習方法を一定にして、一度に沢山でなく、易しい粗大な運動から始め、忍耐強く、微細な運動の獲得を指向し、繰り返して指導することであることがわかった。

4. 石井亮一の体育観

ところで、前節で示したような「滝乃川学園」における体育は、石井亮一のどのような考え方を背景としてきたものなのだろうか。

ここでは、『教育学講義』⁷⁾、『白痴児、其研究及教育』¹⁹⁾、『児童学』¹⁷⁾、そして『精神薄弱児に就て』³⁸⁾の中に散見される記述から彼の体育観を拾ってみることにした。

石井亮一は、その初期の著作物『教育学講義』の中で、「身体の教育、即体育」について、「身体の教育、即体育は児童身体の養護のために施すところのものにして、適当なる食物空気を与へ、皮膚の清潔、身体の運動を奨励し、疾病を未発に防ぐ等の作用を示す。」⁹⁾と定義している。

そして、「体育の直接主眼とするところは身体の完全円満なる発達にありと雖、もと身体と精神とは密接なる関係を有し、精神は身体によるにあらざれば決して外界に紹介し得られざるものなる

が故に、従って体育の効果は、著しく精神に影響を及ぼすを常とす。即ち、身体の爽快と活発とは精神の活動を容易ならしめ、観察思考の力を助長し、善に進む快感を發せしめ、自信勇気を給与し、且これなくば至良の意志も何事をもなすこと能はざる実行力を養成す。これに反して、身体に病患あれば知性鈍く、情感を鬱屈せしめ意志の力弱くす。されば身体の教育と精神の教育とは、両々相待ちて始めて人格の完成を期すこと得べきなり。」¹⁰⁾、「人体の物質代謝に欠くべからざるものは、新鮮な空気なり。……(中略)……これ体育上歎すべきことなり。」¹¹⁾、「運動宜しきに適ふときは、心臓肺臓の動き活発にして血行を励し呼吸を促進し、多量の瓦斯交換を営む。而して其結果、身体組織の老廢成分を燃焼変化するの度を増す。運動の結果は、これに止まらずして精神の過勞より生ずる神経系統の疲労を治し、精神を爽快ならしめ、人の風味を高む。

運動には左の種類あり、

- (一) 規則運動 規定ある遊戯、体操等
- (二) 自由運動 遊戯、散歩等
- (三) 技術運動 テニス、水泳等
- (四) 手工運動 裁縫、割烹等

幼少の際に於て最広く行はるるところの体操法は遊戯なり。遊戯に於ては、身体の自由活動を許すが故に、平生運動の及ばざる筋肉をも動かし、従て全身の發育を助く。而して其効果はこれに止まらず、兒童の注意力観察力と兼ねて秩序、協同、活発、親切、友愛、忍耐等の美德を養ふに至る。チャールス・キングレー曰く、遊戯は道義の健全を助長す。兒童は運動場に於て書籍の供給する能はざる益を得るものなり。兒童はここに於て、常に勇敢辛抱の氣を得るのみならず、尚一層の美德たる忍耐、克己、正義、名誉及他人の成功を賞讃してこれを嫉まざる等の心を養ふ。而して其美德は世に立つ場合に於て確固善良の基礎をなす。若しこれなくば、何等の事業も遂に無効不完全なるを免れずと。体操の目的とするとところは、筋肉(随意筋)の整正運動にあるが故に、其調和的発達に効あり、而して其精神に及ぼすところの効果も亦決して少からず。即ち命令に従ひて動作する時、不知不識の間に意志の修練をなしつつあり。秩序を重んじ規律を尊ぶが如き美風は多く体操の賜なり。運動の場合に於て教師の注意すべきは、兒童の運動がよく其発達に適し且過度に失せざらんことなり。」¹²⁾、「人の身体は、活動の後其元氣

を復し、其機関の損失を償ふために、適當の休息を要すること決して運動に譲らざるものとす。……(中略)……過度に注意を勞せずしてなし得るものは自由の遊戯あるのみ。されば随意に遊戯せしめて時々精神を休息せしむべし。」¹³⁾、「抑白痴、痴愚、遲鈍の状態にある兒童の身体は、精神と共に甚不完全を極め、形態多くは整はざるを常とす。されば普通兒童に於ても一層体育に注意し、以て及ぶべき限り身体の強健と其活動とをはかり、且これを統一整理して精神の活動と調和一致するように至らしめざるべからず。実に白痴教育に於て、身体の教育と精神の教育とは互に相錯綜し、全然これを區別して論ずる能はざるが如き觀あり。」¹⁴⁾、「白痴教育に於る運動の主要なる目的は、兒童の痙攣的、自働的運動の矯正に加えて、身体の構造を強健にし且筋肉の統御を自由ならしむるにある……(中略)……近來歐米に於ては、リング式の体操を以て最もかかる兒童の体育に適せりとし、折衷して採用するところ多し。……(中略)……晴天の日は、少なくとも2時間以上戸外に出でて日光に触れ、新鮮なる空気を呼吸せしめ、且快活に運動せしむべし。」¹⁵⁾、「精神の發育陶冶を全くせんことに力むるものを、形式的若くは教育的教授と示ふ。……(中略)……後者は知力の養成を主とするものなり。……(中略)……これによりて推理判断の力を養はんことを企画する教授は形式的なり。」¹⁶⁾として、体育を「身体の養護のために施す」⁹⁾ものとして位置づけていた。

そして、『白痴兒、其研究及教育』では、身体的に、体重、身長共に發育が劣っていることを發育異常として示し、自由な歩行が出来ないこと、歩行開始年齢の遅れること、動作が奇異で、自己の身体を統御することが出来ず、運動調節の障害があることなどを例にして、運動の異常の存在を示し、その他、感覚の異常がみられることを示したうえで、生來の白痴(生理的成因によると考えられる知的障害)は、「運動其他の方法により、身体強健に向ふに至れば、知識も亦これに伴ひて進むものなれば、体育と知育とは此場合に於て殊に最密接の関係あるものなり。」²³⁾、「若體質能く教育に耐ふるまでに強健となれば、適當なる指導により精神も亦頗る発達するものなり。」²⁴⁾、「これを教育する場合に於て、若幾分にては、医療によりて治癒し得べくんば、必ずこれを盡し、以て出来得べき限り身體教育の障礙を除くを要す。」²⁵⁾

「これに反し、白痴にありては、其身体も精神も共に甚不完全にして、他の健康体に見るが如き自然の発達は、到底これを見るべからず。故を以て、教師の普通の児童に於るよりも、一層の努力干渉をなし、以て及ぶべき限り、身体活動を盛にし、且これを統一整理して、精神の活動と調和一致せしめ、兼ねて覚官を練習して、容易に外来の刺激に感応するに至らしめざるべからず。」²⁶⁾、「健全なる児童の成長発育する順序を追ひ」²⁷⁾、「第一の務は、児童の不随意運動を矯正するにあり。」²⁸⁾、「実に或場合に於て此無益なる運動は、却て有益なる運動の基礎となるものにして、秩序的にこれを誘導啓発する時は著しき進歩を見ることあり。」²⁹⁾

また、『児童学』では、「彼を刺激して幼児の未発達状態より脱せしむるものは何ぞ。其最力のある刺激として遊戯の衝動を挙げざるべからず。」¹⁸⁾

更に、『精神薄弱児に就て』では、「精神薄弱者も人である。……（中略）……人の半人前、三分の一、四分の一の人前にてても可であるから、天賦の能力を発揮して分相応の働きをなすべきである。ここに於てか、教育と授産との必要が起って来るのである。」³⁹⁾「身体の異常を矯正する目的を以て運動体操を課すること」⁴⁰⁾と記していた。

これらの記述から推量れば、石井亮一の体育観は、身体活動を盛んにすることで、精神の活動と調和一致せしめ、容易に外来の刺激に感応出来るような作用を有するものということに帰着するものであり、体育と知育は密接な関係にあるとするものであことがわかった。

5. 石井亮一の体育観と教育方法に影響を与えたもの

知的障害児を教育の対象として最初に明確にしたのは、コメニウスであったとされている。彼はその著『大教授学』（1657）において、「生まれつき知能の働きの遅い者あるいは弱い者であればあるほどますます人々の助けを受けて、その愚かさ鈍さからできるだけ解放されることが必要であります。」¹⁾と述べている。そして、「まず第一に、子どもの感覚を訓練し、次ぎに記憶力を、それから認識能力を、最後に判断力を訓練するようにしなければなりません。」²⁾と述べ、感覚や直感による具体的認識から教育は始まるべきという、現今の感覚運動教育を重要な教育原理として初めて主唱した。

このような考え方は、ルソーの『エミール』（1762）の中にも、「感官は最初に開発されねばな

らない。」⁵⁰⁾と述べられ、感覚が教育の出発点として示されている。

このような流れに立って、初めて知的障害児の教育を実践したのは、イタルであり、彼は、その著『アヴェロンの野生児』（1894）の中で、まず感受性と集中性を高めるために、注意を喚起し、固着させ、次に、外界刺激の弁別を訓練し、刺激受容準備状態から順次、知覚弁別、表象形成、サイン、概念の成立、そして言語、文字への発達を期待する教育実験を示した。⁴⁴⁾

石井亮一は、このイタルの業績を引用し、『白痴児、其研究及教育』の中で、「イタード氏（Itard）は然らずして、単に教育を受けざるが為に、未発達の状態にあるものとなして意見を異にし、遂にこれを教育せんと決意するに至れり。」³⁰⁾「第一 覚官の教練 第二 知力の教練 第三 感応力の教練」³¹⁾とその教育について紹介している。

イタルを引き継いだのが、前述のセガンであり、彼は、1866年、その実践を元に、『Ideocy, and its Treatment by the Physiological Method』⁵¹⁾を世に出したのである。

このセガンの教育方法は、前述したように「生理学的教育法」と称され、身体的面から運動訓練を始め、感覚という身体と精神を媒介する機能の訓練に進み、次に、この二つの機能の統合から知性の訓練に、最後に道徳の訓練へと移る人間性の育成を目指すものであった。

石井亮一は、このセガンについて、『白痴児、其研究及教育』の中で紹介しているが³²⁾、『白痴教育発達史』の中で、「白痴教育史上に於けるセガンの位地の蕚然として他に卓出せるは、言を待たざるところ。」³⁶⁾「事業を継続してよく今日に至るを得たるもの、セガンに負ふ所少しとせざるを信ず。教育の方法の如きは、余は大体に於て、セガンの方法を踏襲する外、近代科学の教ふる所によりて新に考案せる方法を加へて今なほ研究の途上にあり。」³⁷⁾と述べ、強く影響を受けた存在であると記している。

イタルとセガンの教育に傾倒し、特にセガンの教育方法に深く共感してこの教育を引き継いだのはモンテッソーリ（1870～1952）であった。彼女の教育は、機能の発達を考え、学習は教具と遊戯を契機とし、感覚の原理が取り上げられていた。⁴¹⁾

石井亮一は、このモンテッソーリについては、「彼の仏国のセガンが白痴の教育を試みましたが

法にヒントを得て考案せし、羅馬のモンテッソーリ女史の教育法とか⁴¹⁾と記し、その個性を重視した教育が大切であるとしていた。

さらに、フレーベル(1782~1852)について触れ、「フレーベル氏(Freobel)の考案になれる幼稚園の目的とするところは、玩具(即ち思物)並に遊戯によりて、児童の快樂、興味、觀察力、思考力等を増進啓発するにあるが故に、白痴教育にこれを応用する場合少からず。」³³⁾と遊戯に言及していた。

一方、我が国では、1884年、内村鑑三が渡米し「ペンシルベニア州立白痴院」で看護人として働き、1894年、『流鼠録』としてその体験をまとめた。

この『流鼠録』には、セガンのことが「仏国有名の白痴専門家なる故エドワート・セグウマン氏は白痴病の原因をもって神経機能発達に在りとなせり」⁵⁹⁾として、紹介されている。

前述したように、石井亮一は、1896年、このセガンが渡米し、1897年、ニューヨークに創った施設などを訪問し、セガン婦人に学び、帰国したのであった。

きしくも、内村鑑三と石井亮一はキリスト教に通じ、それ故に、石井亮一は、内村鑑三を介し、セガンの「生理学的教育法」を知り、傾倒していったのであろう。

そして、石井亮一の体育観と教育方法は、前述したように、彼が、外国の専門書を介した研究に熱心であり、常に新しい知識を求めようとする向学心を持ち、加えて、それらを支えた知的障害児に対する深い同情心があったから醸成されたものと考えられた。

彼は、『教育学講義』⁷⁾の中だけでも、欧米諸国の実に48人も幅広い分野の人々の意見を引用しているが、その影響は、「セガンに負ふ所少しとせざるを信ず。教育方法の如きは、余は大体に於て、セガンの方法を踏襲する」³⁷⁾と彼自身が述べているように、セガンから受けたものであった。

6.まとめ

本研究は、石井亮一の著作物を介し、彼の設立による滝乃川学園における体育と彼の体育観を知ろうとしたものである。

その結果、滝乃川学園における体育は教科目のひとつとしてのものであり、各種の身体活動を内容とし、楽しいことを基本として、身体の教育、

すなわち身体の養護のために用意されたものであった。

そして、このような体育観は、コメニウスに始まる感覚運動教育の流れの中にあり、その主要な影響は「セガンに負ふ所少しとせざるを信ず。」³⁷⁾と述べているように、セガンに大きく依拠していることを知ることが出来た。

今後、機会を得て、石井亮一の体育観とその指導法について、セガンの「生理学的教育法」⁵¹⁾との比較検討をしていきたいと考えているところである。

引用文献

- 1) Comenius, J. A. (鈴木秀勇訳. 1962): 大教授学, p99, 明治図書, 東京
- 2) Comenius, J. A.: 前掲書1, p180
- 3) 藤本克己(1932): 滝乃川学園のその日その日, 増補石井亮一全集, 第4巻, 大空社, 東京
- 4) 藤本克己(1935): 前掲書3
- 5) 藤本克己(1932): 前掲書3, p9
- 6) 藤本克己(1935): 前掲書4, p21~22
- 7) 石井亮一(1894頃): 教育学講義, p60, 増補石井亮一全集, 第3巻, 大空社, 東京
- 8) 石井亮一(1894頃): 前掲書7, p62,63
- 9) 石井亮一(1894頃): 前掲書7, p14
- 10) 石井亮一(1894頃): 前掲書7, p15
- 11) 石井亮一(1894頃): 前掲書7, p19
- 12) 石井亮一(1894頃): 前掲書7, p22
- 13) 石井亮一(1894頃): 前掲書7, p23, 24
- 14) 石井亮一(1894頃): 前掲書7, p30, 31
- 15) 石井亮一(1894頃): 前掲書7, p33
- 16) 石井亮一(1894頃): 前掲書7, p59
- 17) 石井亮一(1901~1907頃): 児童学, 増補石井亮一全集, 第2巻, 大空社, 東京
- 18) 石井亮一(1901~1907頃): 前掲書17, p47
- 19) 石井亮一(1904): 白痴児, 其研究及教育, 増補石井亮一全集, 第1巻, 大空社, 東京
- 20) 石井亮一(1904): 前掲書19, p87
- 21) 石井亮一(1904): 前掲書19, p154, 155
- 22) 石井亮一(1904): 前掲書19, p159, 160
- 23) 石井亮一(1904): 前掲書19, p53
- 24) 石井亮一(1904): 前掲書19, p62
- 25) 石井亮一(1904): 前掲書19, p79
- 26) 石井亮一(1904): 前掲書19, p80
- 27) 石井亮一(1904): 前掲書26
- 28) 石井亮一(1904): 前掲書19, p87

- 29)石井亮一(1904):前掲書19, p154
30)石井亮一(1904):前掲書19, p75
31)石井亮一(1904):前掲書19, p76
32)石井亮一(1904):前掲書19, p77
33)石井亮一(1904):前掲書19, p117
34)石井亮一(1907頃):治療教育技術, p205, 増補石井亮一全集, 第1巻, 大空社, 東京
35)石井亮一(1918):白痴教育発達史, 増補石井亮一全集, 第1巻, 大空社, 東京
36)石井亮一(1918):前掲書35, p283
37)石井亮一(1918):前掲書35, p288
38)石井亮一(1920~1925):精神薄弱児に就て 増補石井亮一全集, 第2巻, 大空社, 東京
39)石井亮一(1920~1925):前掲書38, p173
40)石井亮一(1920~1925):前掲書38, p177
41)石井亮一(1928頃):正常児と異常児 増補石井亮一全集, 第2巻, p190, 大空社, 東京
42)石井亮一全集刊行会(1940):治療教育, 大空社, 東京
43)石井亮一全集刊行会(1940):教育学, 大空社, 東京
44)Itard, J. M. (古武弥正訳, 1980):マヴェロンの野生児, 福村出版, 東京
45)北野与一(1981):日本における心身障害者体育に関する史的研究(第7報) 石井亮一の精神薄弱児体育観, 北陸大学紀要, 第5号, 121-132
46)Montessori, M. (阿部真美子訳, 1974):モッテッソーリ・メソッド, 明治図書, 東京
47)森岡常蔵(1906):教育学精義, 同文館, 東京
48)中川一彦(1991):体育(保健体育)と養護訓練に関する一考察, 筑波大学体育科学系紀要, 14:1-8
49)中川一彦(1995):わが国のいわゆる特殊体育(障害者体育)に関する一考察, 筑波大学体育科学系紀要, 18:53-61
50)Rousseau, J. J. (長尾十三二訳, 1967):エミール, p196, 明治図書, 東京
51)Seguin, E. (1866): Idiocy, and its Treatment by the Physiological Method. Teachers'College. Columbia University, NewYork
52)滝乃川学園(1910):学園のまとも, 増補石井亮一全集, 第4巻, 大空社, 東京
53)滝乃川学園(1910):前掲書52, p11
54)滝乃川学園(1910):前掲書52, P22
55)滝乃川学園(1910):前掲書52, p27
56)滝乃川学園(1910):前掲書52, p28
57)滝乃川学園(1940):石井亮一伝, p57, 増補石井亮一全集, 第4巻, 大空社, 東京
58)津曲祐次ほか(1985):障害者教育史, 川島書店, 東京
59)内村鑑三(1894):流鼠録, 内村鑑三全集3, p57, 岩波書店, 東京
60)和久田佳代(1987):精神薄弱児の体育指導に関する研究, 筑波大学体育研究科修士論文 私家版